



大図研京都ワンディセミナーのご案内

テ ー マ：『若手研究者の文献利用環境を巡る問題と図書館へのニーズ』

概 要：大学院生数の増加に伴い、若手研究者の就職問題が顕になってきています。そうした中、不安定な身分のまま、教育・研究活動続ける必要に迫られながら、文献利用環境に恵まれない現状を指摘する声があがっています。今回は、こうした「若手研究者問題」に取り組んでいる講師をお招きし、図書館と若手研究者の関わりを考える機会を設けます。

※本ワンディセミナーは、日本図書館研究会の第 302 回研究例会との合同開催です。

開催日時：2014 年 1 月 25 日（土）14:00-17:00

会 場：キャンパスプラザ京都 第 1 会議室（2 階）

JR「京都」駅下車中央口より徒歩 3 分（JR 京都駅ビル駐車場西側）

発 表 者：崎山 直樹 氏（千葉大学普遍教育センター）

菊池 信彦 氏（国立国会図書館関西館）

共 催：日本図書館研究会

参 加 費：無料

※終了後懇親会を予定しています。

申込方法：大図研京都ワンディセミナー申込フォーム

(<http://www.daitoken.com/kyoto/event/20140125.html>)

からお申し込みください。

申込締切：2014 年 1 月 21 日（火）

※申込無しの当日参加も可能ですが、資料の準備や懇親会会場確保のため、なるべく締切までのお申し込みをお願いします。

（会場の収容定員を上回る参加希望があった場合、入場をお断りすることもあります）

[目 次]

大図研京都ワンディセミナーのご案内	…	1
小特集：大図研京都ワンディセミナー『大学と電子書籍』の現状と未来」参加報告		
電子書籍が普及したら図書館はいらない。かもしれない	村上 健治	… 2
大学図書館の電子化と未来	浜田 紳吾	… 3
『大学と電子書籍』の現状と未来」に参加して	小原 紗貴	… 5
新入会員挨拶	今野 創祐, 野村 明日香	… 7

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：kyoto@daitoken.com（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：<http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

電子書籍が普及したら図書館はいらない。かもしれない

村上 健治

台風 18 号で一部が水没した地下鉄東西線が運行を再開した 2 日後の 9 月 21 日に岡崎公園近くの京都市国際交流会館でおこなわれた標記セミナーに参加しました。当日は少し汗ばむぐらいの行楽日和で、三連休初日の京都駅は観光客でいっぱいでした。

セミナーの講師は慶應義塾大学メディアセンター本部の入江伸さんです。電子学術書利用実験プロジェクトを中心になって進めておられる入江さんのお話しがうかがえるとあって、会員でない方も含め多くの参加者がありました。

講演では、電子書籍、資料の電子化を中心に、これまでのご経験と現在の状況と今後の動向について話されました。講演 90 分に対して、その後の質疑応答が 80 分とかなり多くの時間が質疑応答に割かれていたのですが、活発に質問があったために全く時間が足りないうちに終了時間となり、続きはその後の懇親会の席でおこなわれたようです。

以下、質疑応答を含め、セミナーで話題となった点をいくつか報告します。

1. 電子学術書利用実験プロジェクト

最初に電子学術書利用実験プロジェクトを始めることになった経緯が話されました。

Google books と連携した事業で電子化されたものは、パブリックドメインのものが中心で、学生はあまり使わないものが多かったこと、大学の教育と研究のための利用を考えた時、その対象となる「電子書籍」とは、一般に販売されているものではなく、あくまでも「学術系出版社」が発行するものが対象であると考えたこと、パブリックドメインはあまり学生が利用しないが、かといって出版後数年以内のものは出版社としても紙の本を販売したいだろうから電子化に向かないので、出版後数年以降の資料を電子化の対象と考えたことが述べられました。

2010 年に始まったプロジェクトも今年で 4 年目になります。今は他大学のプロジェクト参加も受け付けており、神戸大学・大阪大学・福井大学・奈良先端科学技術大学院大学・立命館大学が参加しているそうです。

2. 教育の電子化

教育の電子化は、既存の紙を単にスキャンしただけではダメで、教材を作成するところから電子化していかないとなかなか進まないと思われます。

紙と電子の双方を取り扱うハイブリッドライブラリーは、双方の媒体を維持しなければならないという点でコストが高くなってしまいます。今は紙の維持に多くのコストがかけられていますが、今後は電子にもコストを割いていかなければなりません。どちらのコストも負担していくことは今の図書館には無理があると思われます。

ただ、電子媒体を資料保存のために活用することは、技術的に未解決の問題がありますので実現は難しいと思われます。保存に関しては当面、紙資料に依存せざるを得ず、電子媒体はあくまでも利用のためのものになると思われます。

また、電子化の進展は、学問分野によって大きく異なります。医学系は電子に移行しつつありますが、理工学系は案外、紙に依存する部分も残っています。法学は六法や判例等が膨大なもので、電子化に適しているかもしれません。図書館でよく利用されている 10 万冊程度の図書を電子化し、クラウドにおいて、利用するためのアプリをつくれば、図書館はいらなくなるかもしれません。

3. 大学図書館の市場

分野にもよりますが、市場規模としての大学図書館はとても小さいものです。小さな需要しかないのであれば、書籍の電子化について出版社に対して何を提言しても影響力はありません。

4. 学生の勉強

学生は、iPad、スマートフォン、PC をうまく使い分けているようです。電子書籍があっても、紙の本も利用されています。様々な媒体を使い分けていますが、プラットフォームはできるだけ統一するようにもしているようで、例えば、ノートも PDF にするなどして、iPad に集約するなどしていつているようです。ただ、これらの操作は直感的に行えることが重要であり、マニュアルを参照しなければ使えないような機能は、あまり使われないようです。

また、学生の生活は経済的にもとても厳しくなっています。そのことは考えておく必要があります。

5. 図書館の役割

図書館の役割は、授業にあわせて利用できる資料の提供とアクセスルートの整備になってくるのではないかと思います。教材のマイクロコンテンツ化（章・あるいはページ単位での利用）も考えておく必要があるのではないのでしょうか。

図書館はもっと教育のことを考えて、教材作成など教員の教育支援も考えていけばよいものと思われそうですが、図書館員自身がそのような仕事を否定しているようにも思われます。障害者支援にしても、著作権法 37 条の規定にどれだけの図書館が主体的に関わろうとしているのだろうか、という指摘がありました。

6. その他

電子書籍の活用にあたって著作権処理は大きな課題です。今のままでは教育のためにはとても不便なので、何らかの方法を考えていく必要があります。

中華人民共和国を中心におこなわれている CADAL プロジェクトやシンガポール、韓国の電子化の動きに比べると、日本は相当遅れています。

入江さんのお話しは、とてもおもしろく、また、個々のお話しの根拠として、業務統計などの裏付けがしっかりしているため、説得力のあるものでした。このような有意義なセミナーに参加する機会を設けていただいた京都支部のみなさまに感謝申し上げます。

むらかみ けんじ（滋賀医科大学附属図書館）

電子学術書利用実験プロジェクト <http://project.lib.keio.ac.jp/ebookp/>

小特集：大図研京都ワンディセミナー「『大学と電子書籍』の現状と未来」参加報告

大学図書館の電子化と未来

浜田 紳吾

加させていただきました。「大学と電子書籍」の現状と未来」というテーマのもと、慶應義塾大学メディアセンター本部の入江伸氏が講師としてお越しく下さいました。これから全国の大学図書館が避けられないであろう電子化についてのお話ということもあり、参加者の皆様からの質問・意見の声も数多く挙げた大変有意義なセミナーであったと思います。私は学生であり、大学図書館のことなど全くの素人なので今回の報告は大学図書館の利用者である一学生の目線からの感想として参考にしていただければと思います。

電子化の費用と手間について

図書館に電子書籍を導入する上で予算との兼ね合いは必ず障壁となるのでしょうか。入江氏はセミナーを通して度々お金に関することについてお話されておりました。大学における図書館の予算が減っていく中で、紙媒体と電子媒体のハイブリッドは実に非効率であるとした上で、慶應は全て電子化する指針を打ち出したとのことでした。また、授業に使う教材や資料なども紙媒体で印刷して学生に配った後にスキャン→電子化するよりも、始めから電子化したデータ(=ポーン・デジタル)を配ったほうが手間とコストが大幅に削減できるであろうとのことでした。学生としても、ノートを「写させてもらう」よりもデータを「移させてもらう」ほうが楽です。ある程度の情報リテラシーを受けていることが前提となりますが、紙媒体をクリアファイルなどに挟んで整理する手間を考えると電子機器を利用した方が時間を有効に使える気がします。そのような背景から慶應義塾大学では iPad の利用が進んでいきました。

電子化と学生

入江氏により、慶應義塾大学では電子化が進む一方でレファレンス数が減少傾向にあるとのデータが示されました。図書館によっても異なりますが、レファレンス数はしばしばその館の状態を表す重要な指標となります。しかし、これは図書館に紙媒体が不要であるということになるのでしょうか。図書館を利用する学生にアンケートをとった結果、学生は現状を理解し、紙とデジタルをうまく使い分けられていると感じたと、入江氏は述べています。全部読みたいものは本、調べ物を行う時はデジタル、といった具合です。デジタル出版物が本や雑誌でいう章単位・頁単位で買えるようになれば、全ての情報はデータベースとなる、と参加者の方からも意見が出ました。現段階であまり整備されているとは言えないこの分割購入制度を上手く進めていくことが、電子書籍に課された今後の課題ということでしょう。また、このアンケート結果は先ほど述べたレファレンスも含めた従来型の図書館のシステムもえいや、と一概に捨てることはできないという裏付けにもなると思いました。

電子化がテーマといってもやはり参加者の多くは図書館員というだけあり、紙媒体に特別な思い入れをお持ちの方が多いように見受けられます。しかし、入江氏は「これからの図書館は教科書を電子的に提供するなど、電子化を進めないと生き残れないのではないか」と述べておりました。Evernote でメモをとり、Dropbox でデータ共有をするというのは今の学生にとって当たり前であるとも述べています。これからの図書館、特に大学図書館に携わる人はこういった学生のスタイルを受け入れていかざるを得ないと思います。

では、特にどのような学生が電子化を待ち望んでいるのでしょうか。入江氏は図書館や学生に関する複数の統計データを用いた上で、医学系学部を挙げておられました。大学図書館の資料の貸出状況を見ると医学・薬学・看護の学部は直近 10 年に出版された資料の利用が顕著であり、それ以前のものになると貸出が急減するというのです。それに対して理工学系や人文社会系の資料は、出版から 30~40 年経った資料でも利用されており、利用者の求める資料の幅がある程度分散されているとのことでした。また、医学分野の資料というのは比較的高価なものが多く、教育費の高騰や仕送り額の減少とい

った要因も相まって電子媒体による貸出が進んでいったと分析しておられました。

もちろん医学部以外の学生も電子化への要求はあります。関係資料を PDF で保存しておいたほうが利用しやすく、レポートに関する本を何冊も持ち歩きたくないといった学生は、iPad などですべての情報をひとまとめにして、持ち運ぶことを好みます。これはつまり、それぞれが外部からの情報を取捨選択し、iPad の中に自分なりのデータベースを構築していることになるのだろうか、と思いました。

大学図書館

これは講演後の質疑の時間に出たことなので少し本筋とは外れてしまうかもしれませんが。とある参加者と、入江氏のやり取りの中で現在の学生は一体、何のために学習しているのだろうかという学生や大学の本質を問うような話になりました。その時に強く感じたのは、「大学図書館側がやっていることに学生は果たしてついていっているのだろうか」ということです。学生の分際で大変生意気な意見ではありますが、様々な大学の実情を見ていると大学や図書館側ばかりがやる気に満ちていて、結局学生はあまり興味を持たないといった事例が間々あるように見受けられます。逆にしっかりと学生の意見を取り入れ、地に足をつけた活動を行っている大学は、ほとんどの企画においてそれなりの成果が出ているように思います。このような運営者ばかり集まるセミナーで運営についての意見交換を交わすことも大切ですが、それと同時に学生側に目を遣ることも欠かさないという態度が、これから多様化していく大学図書館の進路を見極めるために必要なのかな、と考えさせられました。

最後になりましたが、今回のセミナーで電子化についてわかりやすく説明してくださいました入江様と、セミナーを運営してくださいました大図研京都支部の皆様にご心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

はまだ しんご (立命館大学)

小特集:大図研京都ワンディセミナー「『大学と電子書籍』の現状と未来」参加報告

「『大学と電子書籍』の現状と未来」に参加して

小原 紗貴

2013年9月21日(土)、京都市国際交流会館にて大学図書館問題研究会京都支部ワンディセミナー「『大学と電子書籍』の現状と未来」が開催されました。私は今回はじめて参加したのですが、なんと、参加報告の執筆などという大役を仰せつかってしまいました。これも何かのご縁でしょうか。

そもそも私がこのセミナーに参加した直接のきっかけは、上司からのすすめがあったことでした。「なんだか面白そう」と、とりあえず参加を申し込んでみたものの、大学図書館問題研究会についての知識も、「大学と電子書籍」についての知識もあまりないまま、セミナー当日を迎えたのでした。理解不足のままに書き散らしてしまう部分もあるかもしれませんが、ご容赦ください。

講師の入江伸氏は、慶應義塾大学メディアセンター本部に在職され、電子書籍利用実験の中心的役割を担っていらっしゃいます。講演は、利用実験のきっかけ・経緯・方法・現状から学生の反応、今後の見通しまで、実に盛りだくさんの内容で、時にオフレコな

情報も挟みつつ進行していきました。続く質疑応答も盛り上がり、会場は終始熱い空気に包まれました。ちなみに、ここでの「電子書籍」はほとんどの場合、電子化された和書を指しています。

そもそも、どうして、今、大学図書館で電子書籍なのか？もちろんこのご時世、電子資料と無縁ではいけないのはわかっています。しかし、本当にそれだけなのでしょう？大学図書館がやるべきことなのでしょう？今回の講演には、そんな漠然とした疑問に対する明快な回答がいくつも散りばめられていたように感じます。以下、講演と質疑応答の内容からご紹介します。

たとえば、図書館の運営という観点から。私には、とてもショッキングな内容に感じられました。曰く、「電子と紙の両方を求めるのは高コストである」。電子資料が増加すれば、その管理にお金も時間も人手もかかる。一方では、これまでと同じように紙の資料を購入して利用者に供する、そのためにはこれまでと同じようにお金も時間も人手も必要である。現在は多くの図書館でバランスをとって業務にあたっていると思いますが、大学を取り巻く状況が変化していく中で、いつまでその体制を維持することができるのでしょうか。電子資料の増加が今後避けられないのであれば、すべてを紙ではなくデータで管理できるようにしてしまおう、というのは合理的です。限られた予算をいかに有効に使うか、そのひとつの方法が、資料の電子化と電子書籍の提供であるといえるでしょう。

次に、研究・教育・学習支援の観点から。曰く、このままでは「世界と渡り合うだけの基礎的な知的体力が落ちる」。海外の出版事情や研究事情に鑑みると、国内資料の電子化は立ち遅れていると言わざるを得ません。それは、研究・教育・学習の基礎となる資料の電子化が遅れているということでもあります。だとすれば、日本では、電子資料を用いた（研究・）教育・学習の機会が少ないと考えられます。しかしそれでは、電子資料を使いこなすテクニックを身に着けた海外の研究者らと、肩を並べてやっていける研究者が育たないのではないのでしょうか。また一方では、研究対象・土壌としての日本・日本語の存在感が薄れていってしまうのではないかと。とも。学生の生活・学習スタイルの多様化にも対応しつつ、上のような情勢も考慮しつつ…図書館ができることのひとつが、やはり資料の電子化と電子書籍の提供なのです。

さて以上のように、大学図書館と電子書籍についてみてきたところで、しかし壁があるとも指摘されました。たとえば、タイトル数について。少なかったら意味がない、という声はどうしても上がります。反面、著作権処理を考えると、タイトル数を急速に増加させるのは現実的ではないのかもしれないかもしれません。この電子書籍プロジェクトは、学術系出版社を巻き込んで進行しています。しかしながら、出版業界のあり方はいずれ転換期を迎えること、新しい取り組みが必要であることがわかっているにもかかわらず、今このタイミングで協力できる会社は多くはないというのもまた現実です。さらに、電子書籍について、紙資料と同等に著作権を保護するためには、データを認証空間の中にぴたりとしまいこまなければなりません。多くの大学図書館で提供するとなると、認証環境を整備し、標準化することが必要となります。加えて、教育利用での包括的契約を交わすなど、環境や制度の整備は前提であるといえるでしょう。教育関係者の密な連携が求められます。

最後に。講演中、「教育研究の場面における権利を勝ち取っていかなければならない」というお言葉が印象的でした。大学図書館は誰のために何を提供するのか、そのためにはどのようなシステムや戦略が必要なのか。ひとつの答えが、「電子書籍」なのだと感じました。今後の動きに注目していきたいと思います。

以上、拙い報告で申し訳ありませんでした。このたびは貴重な講演をお聞かせいただき、ありがとうございました。

京都支部：新入会員挨拶

2011-2013 年度より、新しく京都支部に加入して下さった会員の皆様にご挨拶をいただきました！今後、順次掲載をまいりますので、どうぞお楽しみに！

● 今野 創祐さん

京都大学附属図書館宇治分館の今野と申します。京都大学には 2011 年の 9 月に採用され、大図研には 2011 年の秋に入会をさせていただきました。入会から早くも 2 年以上が経過し、職場も文学研究科図書館から異動となり、もはや「新人です！」と言うのはばかられるようになってきましたが、このたび、編集委員の方から機会を与えていただきましたので、自己紹介をさせていただく次第です。

私は大阪市の出身ですが、東京の大学で 4 年間を過ごし、その後、1 年間、国書刊行会という出版社で営業や広報の仕事をした後、大阪に戻りまして、2 年と 5 か月の間、中学や高校で、社会科や国語科の教員の仕事をしておりました。その後、縁あって京都大学に図書系職員として採用していただきまして、現在に至ります。

卒業した大学の学部は商学部で、専門に勉強していたのは経営学ですが、正直なところ、文学部に行きたくても行けなかったのが商学部に入ったようなところもありまして、大学卒業後の職歴を振り返りますと、我ながら、文学部の卒業生のような人生を歩んできたなあ、と思います。とにかく、これまで、ずっと本とともに人生を歩んできたような気がします。

そんなわけで、やはり私の趣味と言いますと、一番は読書です（映画鑑賞も好きですが・・・）。割と子供のころから読んできたものは純文学やミステリの小説ですが、この数年、「前衛短歌」と言われる短歌を読むことが多いです。（自分で「詠む」ことはしません。あまり才能がないようですので・・・）

この「前衛短歌」とは、1950 年前後から起こった現代短歌の一ジャンルで、近代短歌の持っていた叙事性・叙情性にこだわらず、反写實的・超現実的な内容を表現した短歌の総称です。と言いましても、何のことだかまいちよくわからないかと思しますので、代表的な歌人とされる塚本邦雄（1920～2005）の作品をいくつか引用してみます。

「日本脱出したし皇帝ペンギンも皇帝ペンギン飼育係りも」

「医師は安楽死を語れども逆光の自転車屋の宙吊りの自転車」

「ロミオ洋品店春服（しゅんぷく）の青年像下半身無し***さらば青春」

要するにこういった具合に、実例を挙げてもやっぱりよくわからない短歌です。（意味がわからないからこそ、芸術的に素晴らしい、と私は思えるのですが・・・）

私は、こういう変な芸術作品を好む変わり者であります。ぜひとも皆さま、大きな心で受けとめていただきまして、今後とも、よろしく願い申しあげます。

いまの そうすけ（京都大学附属図書館宇治分館）

● 野村 明日香さん

この度大図研京都支部に入会しました、滋賀大学附属図書館の野村明日香と申します。私は今年 4 月に滋賀大学に採用されました。大図研に入会した理由は他の大学の方とのつながり・関わりを持ちたいと思ったこと、そして考え方や知識を広げて普段の業務に活かしていきたいと考えたことの 2 点です。分からないことばかりの新人ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

私が勤務する滋賀大学について少しご紹介したいと思います。本学は経済学部と教育

学部の2学部からなる国立大学です。経済学部は彦根市、教育学部は大津市にキャンパスを構えています。そのため図書館も彦根キャンパスに本館、大津キャンパスに教育学部分館と2館に分かれています。私は本館で勤務しています。両館とも各学部の図書館という性格が強いと思います。

経済学部は学部の一学年がおよそ570名です。キャンパスは彦根城の近くにあり、建物の3階あたりからは琵琶湖を見ることができます。緑も多く、落ちついた環境です。

担当している業務は固定されているわけではなく、幅広く行っています。就職したことでサービスの受け手から提供する側へと立場が変わったわけですが、どうすれば利用する人にとって使いやすさだろうか、分かりやすさだろうかと考えてしまいます。難しさを感じながらも精一杯やっています。

私は小さい時から図書館へ行くことが多く、身近な場として図書館を捉えていました。高校では図書室の先生と話すために昼休みは図書室へ通っていましたし、大学でも空いた時間によく図書館へ行っていました。語学の予習をするときもあれば、席についたまま外の景色を眺めることもあり、書庫に置かれた椅子に座って本を読みながらうっかり寝そうになったこともあり、と毎回必ずしも勉強していたわけではありませんでしたが、閲覧席・書庫・コモンズスペースなど、その時の目的と気分で図書館内の場所を変えて過ごしていました。4回生になってからは図書館で開催される講習会に参加するようになりました。開催されていたのは論理的に話す方法を学ぶ「プレゼン入門 話す基本技術」や論文の書き方を学ぶ「論文の書き方&文献の読み方プチ・ゼミナール」などです。私はそれまでこのような内容を習う機会がほぼなかったもので、講習会で習った考え方を使いながら表現する練習ができて良かったと思います。また、受講した講習会は受講者同士でフィードバックを行うのですが、これは私にとって他学部・他学年の人と接することができる機会でもありました。学年が上がると他学部の人と同じ授業を受けることが少なくなるので楽しかったです。

このように普段から図書館を利用することが多かったのですが、私がこの仕事を志望した理由には、就職活動を進める中で、何かしらの形で教育に関わりたかったこととあります。大学では文学部に在籍していましたが、司書課程がなかったため他大学の講座で司書資格を取得しました。教職課程も履修していたので、教員採用試験を受験するか迷いながらも最終的に大学職員を志望しました。少しずつになると思いますが、学習・研究が進むような環境作りができればと考えています。

これから京都支部の皆様と活動・交流していけることが楽しみです。今は皆様から学ぶ一方になってしまうかもしれませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

のむら あすか (滋賀大学附属図書館)

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2013年度(大図研会計年度2013.07-2014.06)に入っておりますので、2013年度の会費の納入をお願い致します。また、2012年度以前の会費をお納めいただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000 (大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000) です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904 大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 (kyoto@daitoken.com) まで。